



「寿式三番叟」

旭座人形芝居保存会

能の「翁」を人形淨瑠璃に取り入れ、景事物として上演する儀式の舞が「寿式三番叟」です。旭座では、お米やお茶などの収穫に対する五穀豊穣と、息災延命を願い、毎年1月20日の「初光り」と、7月15日の「翁渡し」による「座渡し神事」が継承されています。

右手に神鈴、左手に扇子を持ち、粋時きをイメージした躍動感あふれる動きで四方を清めます。黄金の稻穂が垂れるよう飾から次々と粋を時きながら、くまなく舞台を駆け回り、皆様のご健勝とご多幸を祈念します。



「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段

八女市立黒木小学校人形淨瑠璃クラブ

阿波の国・徳島藩で、名刀・国次が何者かに奪われる事件が起きる。藩士・十郎兵衛は、この刀を取り戻すため、盜賊銀十郎として、女房のお弓とともに浪速に住んでいた。その上、夫の十郎兵衛は、今日中に五十両の金子を用立てなければならない事情にあった。

ちょうど、金策で夫が留守のところへ、巡礼姿のかわいいらしい女の子がご報謝に訪れる。お弓が身の上を聞くと、国は阿波の徳島、父の名は十郎兵衛、母はお弓と答えた。それは紛れもないわが娘、お鶴だったのだ。

お弓は娘に災いが及ぶことをおそれ、母と名乗りたい気持ちをぐっとこらえるが、お鶴は「小さい時に別れて親の顔もはっきりと覚えがなく、よその子たちのように、母さんに髪を結ってもらいたい」と泣き出してしまう。お弓も涙をこぼしながら、お鶴の身を案じ、徳島へ帰るように諭す。

そんなお弓に、「あなたが母さんのように思えてきました。何でもしますからここに置いてください」とお鶴は懇願するが、置いてやることはできない。お弓が帰りの旅費を渡そうとすると、お鶴は小判をもっているので心配ないと告げる。わが娘のいじらしさに打たれ、自分の簪で髪を結い直し、泣く泣くお鶴を送りだしたお弓。しかし、このままでは二度と会えないと、連れ戻す決心をしてお鶴の後を追いかけていくのだった。



「御所桜堀川夜討」弁慶上使の段

旭座人形芝居保存会

「御所桜堀川夜討」

文耕堂・三好松落合作の時代物で、1737年の大阪・竹本座が初演です。全5段構成で、源平合戦のうち、源頼朝・義経が不和に陥ったころを描き、三段目の「弁慶上使の段」が最も有名です。

「弁慶上使の段」あらすじ

鎌倉からは、義経の身の潔白を示すために妻である卿の君（平時忠の娘）の首を差し出せ、と要求される。弁慶は上使として卿の君を預かる侍従太郎の館へやってきた。相談の末、侍従太郎と花の井夫婦は年恰好のよく似た腰元の信夫に、卿の君の身代わりを頼む。信夫は受け入れるが、居合わせていた信夫の母おわさは承知をしない。

おわさは十八年前、稚児姿の少年と一夜の契りを結んだ。少年は逃げてしまうが、とっさに衣の袖を掴み、おわさの元には紅の衣の左袖だけが残った。この袖を頼りに名も知らぬ父親に会うまでは、娘を死なせるわけにはいかないのだ、とおわさは語った。すべてを室外から聞いていた弁慶は、障子の隙間から信夫を突き刺した。

（公演ここまで）あらわれた弁慶をおわさは泣いて責め立てるが、弁慶は上着を脱ぐと左袖がない紅い衣を見せた。十八年前のあの時の稚児は弁慶だったのだ。おわさは信夫を抱き起し、弁慶が父親だったと伝えるが、信夫はもう目も見えず耳も聞こえない。身寄りのなくなる母を心配して侍従太郎夫婦にあとを頼み、母には父とめぐり合って仲良く暮らしてほしいと言い残して事切れた。おわさは娘の遺骸を抱き上げて、父とわからずに刺し殺された境遇を泣き悲しんだ。弁慶ははじめて娘の存在を知ったが、顔を合わせては身代わりに殺すことに未練が残ると思い、顔も見ずに殺したのだと語る。生まれたときの産声以来泣いたことのなかった弁慶は、この時はじめて涙を流したのだった。

刻限が近づき、侍従太郎は信夫の首を落とすと、その刀を自分の腹に突き立てた。自分の首を添えることで、卿の君の首が偽物ではないと思わせるためだった。弁慶は二人の首を両腕に抱えると、取りすがる花の井とおわさを振り捨て、堀川御所へかえっていくのだった。